

ジャムスから二人の子と

岩手県 佐藤 みつ江

渡満したのは、昭和十五年十一月の末でした。夫は三江省佳木斯に在住、三江省公署に奉職していました。結婚当時は薄給であったので、幼稚園の保母や和裁等をして其稼ぎをしました。夫は翌年に文官試験に合格、十七年三月には長男邦彦が誕生、生活が安定して喜びもつかの間もなく、夫がチフスにかかり一家は大きな試練に立たされたことがあります。その後、夫は満州国通信社（同盟通信）佳木斯支局次長に。次いで公安局から諜報関係の秘密職員を委嘱され、日給が従来 of 三倍も手にすることができました。郷里に毎月百円ずつ送金しました。小学校長の月給が九十七円の時代です。二十年一月には長女和子が誕生し、幸福な日々 of 明け暮れでありました。

しかるに八月九日、ソ連軍の不法侵入、同日午前十時、

夫は八五三部隊に応召。八月十二日朝、大橋支局長に引率され、数えて一歳の娘を背中に、四歳のむすこの手を引き、両手に物を抱えて避難列車に乗りこみ、佳木斯駅を立って凶桂線を南下しました。東安省の勃利駅に到着すると「前の駅が敵機に爆撃されているから、一回下車し、山中に避難せよ」との命令を受けて、しばらくすると、今度は乗車して、佳木斯に引きかえす命令を受けました。山中から駅にくる途中、長男邦彦を見失い、必死の搜索に狂奔するという失態もありましたが、さいわいに、支局長婦人が連れて帰ってくれました。佳木斯に引きかえすと、今度はそのまま列車は綏佳線を経由してハルビン方面に向う旨いわれ、三昼夜の旅をつづけて、北安省綏化駅に着いたら、日本が無条件降伏したことを知らされ、一同ガッカリして涙に暮れるのみでした。綏化で下車し、郵政関係の宿舎に一泊して、翌日無蓋貨車にすし詰めになされてハルビンに向けて出発しました。しかし、連日降雨なので、仮設の破れテントに貨車の一隅にゴザで囲んだ便所には弱りました。貨車を運転する機関手は、満人なので、一時間ぐらい進むと停車して金を要

求される。払わないと何時間でも動かない。停車時間が長引くと満人が略奪にくるといふ始末。しかも、食糧の配給は皆無の状態。娘はまだしても、むすこは「お母さん、家に帰って、たたみの上でおいしいものを食べたり寝たりしよう」と訴えられると困り果て、涙してしまいました。時には、雨水を飲んで飢えをしのぐこともありましたが、ようやく二十日にハルビンに到着し、満州国通信社ハルビン支社にたどり着き、支社付属の倉庫に落ちつくことになりました。倉庫はコンクリートで、敷きふとん一枚を支給され、親子三人がうずくまって寝ました。ハルビンでの生活は、各自持ち金で食糧を求めるが、必要な燃料を確保するため、薪拾いや干草刈り等が主たる仕事でした。毎朝、松花江の川辺では病死した水葬に出くわすことがしばしばでした。ハルビン滞在一か月あまりにして新京へ転送。

新京では、和裁、洋裁をいかしての生活でしたが、仕事で切れると、朝三時に起床して、闇市場に行き、煙草、食料品、その他を仕入れて、行商をつづけました。顧客は、八路军に抑留された中国兵や歩哨にあたる八路军で

した。夏を迎えた七月二十日、帰国命令ができましたが、不幸にも娘和子が栄養失調の重体で進退きわまってしまいました。が、不幸中のさいいいにも、伝染病患者が発生して、三週間の出発延期が申渡されました。ホッとして治療に専念の甲斐があつて、快方に向い、八月中旬新京を出発、奉天を経由して、コロ島へ。懐しの祖国博多に第一歩を印し、所定の手続きを踏んで、博多駅を出発、おどる気持ちをおさえながら、一路岩手に直行、家族に迎えられたのは昭和二十一年九月八日でした。一男一女をとめないぶじにふるさとの地を踏んだとはいえ、ソ連に抑留された最愛の夫から生死の音信がありません。昭和二十二年、二十三年と相次ぐ台風に見舞われ、田畑はもちろん、家屋まで流失、ぼうぜん自失の状態におちいました。生活を確保するため、土木作業にはげんでいました。天は私どもを見捨てず、昭和二十三年十二月十日、夢にみた夫千代治が九死に一生を得てぶじに復員することができました。